

天野郁夫編『学歴主義の社会史——丹波篠山にみる近代教育と生活

世界——』（有信堂、1991年）への個人的体験にもとづく書評

野村正實

1 はじめに

本書が出版されてから現在までに、すでに17年が経過している。書評は、通常であれば出版されてから数年以内に発表される。しかし私は、この本を書評しなければならぬ、と思った。本書が、教育社会学の研究成果と問題点を明確に提示している、と思えたからである。

私はここ数年、日本的雇用慣行にかんする研究をおこなってきた。その成果を2007年8月に『日本的雇用慣行——全体像構築の試み——』（ミネルヴァ書房、税込5,040円）として公刊した。この本の執筆過程で、以前から気になっていた天野郁夫の著作すべてを読む必要があると思い、実行した。著作の数が多いだけに、さすがに重複はまぬがれないが、天野の仕事に、改めて敬意を覚えた。

『学歴主義の社会史——丹波篠山にみる近代教育と生活世界——』と題する本書を、天野のすべての著作を読み進める一環として、目を通した。じつに面白かった。ただし、その面白さは、いわばその本の主張に引き込まれたというものではなかった。CiNiiで検索すると、本書への書評は『社会学評論』43巻3号と『教育社会学研究』51集の2本が出ている。読むと、どちらの書評もおざなりである。「日本近代化を問う新しい視界」というキャッチコピーにもかかわらず、教育社会学の専門家から見れば、本書に取りたてて新味がないと判断されたのであろう。本書の結論だけを重視するならば、私も本書をそう高くは評価しなかったであろう。私が本書をととても面白いと思ったのは、丹波篠山という田舎町に1930年前後という早い時期に「学歴主義」が成立したという事実発見にあった

丹波篠山という田舎町に1930年前後という早い時期に「学歴主義」が成立したという事実発見を、本書の著者たちは、遅ればせながら、丹波篠山のようなひなびた田舎町においても学歴主義が押し寄せた、と解釈した。学歴主義は強力なので、こんなひなびた田舎町をも飲み込んだ、というわけである。本書を読んで私は、本書の執筆者たちとはまったく異なった考えをいただいた。なぜこのような田舎町に1930年前後という早期に学歴主義が成立したのか、と思ったのである。

私は静岡県の田舎町で生まれ育った。私が生まれた時点では静岡県小笠郡（お

がさぐん) 横須賀町 (よこすかちょう) という名称の町であり、「昭和の大合併」のときに大淵村 (おおぶちむら) と合併して大須賀町 (おおすかちょう) となり、最近の「平成の大合併」で掛川市に吸収されてしまい、掛川市横須賀地区と呼ばれている。私は、「私が生まれ育った場所は掛川市です」、という気はまったくくない。都市機能などなにもない田舎が、掛川市に吸収されたからといって、「市」にはならないからである。

横須賀という名称の市町村は3つあった。一番有名なのは神奈川県横須賀市で、次いで愛知県の横須賀町 (1969年に合併で東海市となった) であった。それらと区別する意味で、私の田舎を遠州横須賀と呼ぶことにする。

遠州横須賀は江戸時代の城下町でありながら、鉄道の発達から取り残され、大須賀町誌編纂委員会[1980]『大須賀町誌』(p.134)自らが「昔から陸の孤島と呼ばれていた本町」と記すような町であった。かつての城下町で産業化から取り残された点で遠州横須賀は丹波篠山と似ていた。しかし、私の個人的体験から断言できることは、遠州横須賀では1960年代前半においても、学歴主義は成立していなかった。なぜ類似の条件であるにもかかわらず、一方の田舎町では1930年前後に学歴主義が成立し、他の田舎町では1960年代前半においても学歴主義が成立しなかったのか、このことこそが問われるべきではないか。このような問が、本書の書評を執筆する動機となった。

この書評は、主として私の体験にもとづいて書かれている。そういうスタイルをとったのは、本書が聞き取り調査を積極的に活用しているからである。学歴意識を解明するために、たしかに聞き取り調査は有益である。そうであるならば、私の個人的体験もまた、なにがしかの価値を持っているということになるであろう。この書評が私の体験をもとにした主観的要素の強い書評であるとしても、私の主張は、文献や資料によっても裏づけられる、と私は考えている。その作業は、このHP上ではなく、いま私が準備している次の研究においておこなう予定である。

私の個人的体験がもとになっているので、私が語ろうとしているのは、男性と学歴との関係に限定される。女性と学歴との関係は、男性の場合と大きく異なる。女性と学歴との関係という重要なテーマについては、別の機会にゆだねざるをえない。なお、私は原則として年号を用いないが、本書が年号で記しているため、本書の紹介部分に限って年号を用いる。

2 本書の主題

「序章」において、編者の天野が本書の4つの主題を指摘している。

第一に、兵庫県の篠山町は、旧国鉄福知山線からはずれ、産業化の波からと

り残されてきた小さな城下町である。この町には旧藩以来の伝統をひく県立高等学校がある。その高等学校の前身は、旧藩主の努力によって設立された私立の各種学校であり、しかもそこでの教育の力点は伝統的な、漢学主体の人間形成教育におかれていた。「伝統的文化モデル」の人間形成教育を理念にかかげて出発した、「地方」の一私学が、学歴主義の制度化の波に抵抗しながら、結局はのみこまれていく過程を明らかにすることで、日本的学歴社会の形成史のかくれた部分に光をあてることができる。

第二に、女性にとっての学歴の問題である。女性にとって教育をうけること、学歴を獲得することの意味を、直接問いかけた研究は皆無にひとしい。それは、学歴研究の関心が、もっぱら地位の達成過程にむけられてきたことの、当然の帰結である。丹波篠山に、町立の高等女学校が設立されたのは、明治44年である。ごく平凡な高等女学校である。その平々凡々たる女学校の、普通の女学生たちの学校生活のなかから、近代日本の女性と学歴を見すえる。

第三に、地域住民の日常的な生活世界における学歴主義イデオロギーの浸透過程を、旧士族、商人、農民という三つの社会集団の別に検討する。三つの社会集団のもつ下位文化のちがいと、学歴に対する意識やその獲得にかかわる行動との関係を、時間をさかのぼって明らかにする。

第四の研究主題は、第二次大戦後におこなわれた一連の教育改革、とくに中等教育改革が、学歴主義の制度化に果たした役割におかれている。それが学歴主義の制度化を、いわば「完成」させ、日本の学歴社会を「成熟化」させる役割を果たしたのではないか、というのが、問題関心である。戦後改革は、学歴主義の制度化の完成にむけて、いわば「地ならし」の役割を果たした、と考えられるからである。

3 本書の内容

本書の主張を要約するならば、次のようになる。ただし、はじめに断ったように、女性と学歴の関係についてはこの書評では取り扱わないため、高等女学校については触れない。以下は、あくまでも男性の世界に限定されている。なお、以下において、カッコ内の数字は、本書のページを指示している。

本書の対象は、「旧国鉄福知山線からはずれ、産業化の大波からとり残されてきた小さな城下町」(11)丹波篠山である。丹波篠山は1748年から6代にわたって青山家6万石（東京の青山通りにその名をとどめている）によって治められ、明治維新を迎えた。

維新後の明治6年に家督を相続した青山忠誠は、明治13年陸軍士官学校を卒業し、数少ない華族出身の将校になった。彼は旧藩子弟の教育・育英にも強い

熱意をもち、「尽忠報国」を目的に明治9年、篠山に「中年学舎」を設置した。この学校は明治11年、多紀郡立の中学校となって青山家の手を離れてのち、明治16年末に火災にあい、廃校となった。しかし、郡内には学校の再興を望む声が高く、有志の寄附金を基本金に、青山家からの経費補助をうけて、明治18年（1885年）、鳳鳴義塾が創設された。この学校は、青山忠誠を塾主とする私立学校であり、中学校の教則に準拠していたが、制度のうえでは各種学校であった。鳳鳴義塾の設立を構想したとき、青山忠誠は「尽忠報国」を信条に、「国家有用の人物を養成」する学校を、具体的には「軍人を養成するの学則を立てる」学校を考えた。こうした塾主の「勤儉尚武」の理念をうけて、漢学者の市瀬禎太郎が鳳鳴義塾の校風をつくりあげた。

明治20年代の初めに同校に学んだ卒業生のひとりによれば、「教科目は、勿論当時の中学校同様のものに準拠して定められたのであらうが、修身は大学、論語、小学、中庸等の講義で、漢学塾そのままと云ふて可なりであった。徳育の中核は、尊王愛国の精神、国家主義、国民主義の高潮であつて、自然欧化思想も強くはあつたが、世界の進運に後れてはならぬと云ふ向上心は、勿論強烈で、塾主忠誠公の国家的人材養成と云ふ、義塾設立の活きた精神を以て、端的に塾生の心情を鼓舞し感激せしめて、所謂同家有用の材とならなければならないとの進取的精神が涵養せられたのである。此の徳育方針は、市瀬禎太郎先生によって、遺憾なく強調徹底せられた」という。(37-38)

鳳鳴義塾は、軍学校入学者のために準備教育をおこなうことを主要目的としていた。教育内容は儒教的な徳育教育主義であった。主として漢文を教え、英語数学などの教員は欠員が多かった。徳育教育の一環として、独自の学校行事があった。

(1)錬磨会。錬磨会は、学校の秩序維持を目的とした生徒の自治組織として、市瀬の発案で明治20年に設立された。当初は卒業生を中心に若干の上級生が加わる学外組織であったが、しだいに上級生が中心になり、教員も臨席する学内組織になった。論語を輪読し、時事問題の研究をおこないながら、自己研鑽による人間形成をはかるというのが主たる活動の目的であったが、錬磨会がその目的にそって円滑に機能していたのは、最初の約10年間だけであった。明治30年前後からは、上級生が鉄拳制裁を用いて下級生を服従させる、不良のレッテルをはられた学生を退学させる、さらには、教師の素行調査をおこない、塾風にあわない教師を排斥する等々の事件を引き起こすようになった。

(2)幣取り（へいとり）。幣取りは真夜中に神社・寺・山中・墓地などに置いた幣を取りに行く学校行事である。明治16年、市瀬の発案で、胆力養成を目的にはじめられた。やがて、幣取りは、本来の目的であった自発的な胆力養成とはほど遠い暴力的な行事となっていった。それは、錬磨会の変質とほとんど時

を同じくして起こった。

(3)武装旅行。武装旅行は、他の中学校でいう修学旅行にあたる行事である。しかし、鳳鳴義塾では行事と演習を兼ねた旅行として武装旅行とよばれた。明治28年からは、1～2週間にわたる旅行となり、在学者全員の、軍隊式階級制度による班編成のもとに、教員も同行して、自炊しながら一日8～9里（32～36km）の行軍をした。困難や欠乏に耐える精神力、体力を養うことが目的とされた。他の学校行事がしだいに形骸化し、批判の対象となるなかで、校是の勤儉尚武を体現するものとして、これだけは、高い評価を与えられていた。

しかし、独自の校風を持つ漢学塾としての鳳鳴義塾は、存続が困難になっていった。明治19年の中学令、さらに明治32年の中学令をはじめとして、正系の中学校の整備が進展しつつあった。正系の中学校は、その卒業資格が上級の学校を受験する資格となった。各種学校であった私立鳳鳴義塾は、正規の中学校の資格を持てなかった。学校の独自性を維持するために各種学校として存続するのか、それとも教育内容を普通の中学のように変え、正規の中学校の資格を取得するのか、決断を迫られたとき、鳳鳴義塾には、正規の中学校の資格を取得する以外の道はなかった。ただし、独自の校風を維持するために、財政的な無理を承知で私立中学となった。

しかし、私立中学としての存続は、慢性的な財政難のために困難となっていた。元藩主青山家は、生活を切り詰めて鳳鳴義塾を支援したが、学校経営には多額の費用がかかり、ついに支えきれなくなった。県立への移管は、青山家の学校経営への影響力が喪失することを意味した。県立鳳鳴中学は、県の管理監督下で普通の地方中学校となった。

「学歴主義の制度化」とは、「学歴重視のイデオロギーが、学校や企業などの組織体や人々の日常的な生活世界に浸透し、人々の意識や行動を規定し支配していくプロセス」(12)を意味している。私立鳳鳴義塾（明治18～明治31）→私立鳳鳴中学（明治32～大正8）→県立鳳鳴中学（大9～昭和23年）という歴史は、「「伝統的文化モデル」の人間形成教育を理念にかかげて出発した、「地方」一私学が、その学歴主義の制度化の波に抵抗しながら、結局はのみこまれていく過程」(12)であった。

「学歴主義の制度化」は、さまざまな社会層に学歴の重要性を意識させるプロセスでもあった。丹波篠山においても、士族、商人、農民に学歴意識が浸透していった。

「旧士族は、明治維新による変革以前に、俸禄をはむ武士として、いわば俸給生活者としての経験をもち、また藩校での教育を生活の切り離しがたい一部としてきた社会集団である。維新後、彼らが近代学校教育制度の最初の、積極的な利用者となり、近代組織で働く俸給生活者へと「転生」ととげたのは、ご

く自然な選択であったといつてよいだろう。彼らは抵抗なく新しい組織と学歴の世界に入り、また学歴取得と組織のなかの職員層へと、次の世代を動機づけていった。」(212)

「義務教育のあと、さらに上級学校に進学し、より高い学歴を取得することの重要性は、家業を継承する商家や農家の長男の場合にも、しだいに認識されるようになっていく。農業や商業を、より発展的に営むためにという「手段性」の意識もあったかもしれない。しかしそれ以上に、中・高等教育の機会が拡大し、社会・経済的に地域の上層ないし中の上層とみなされる人たちのあいだに、中・高等教育機関への進学者がふえはじめると、中・高等教育をうけていることが、しだいに地域社会のなかでの人々の地位の表象として、重要性をもちはじめ。昭和初期はそうしたかたちで、学歴主義が、商家や農家のような、近代組織の外で生活する人々の生活世界にも急速に浸透しはじめた時期とみることができる。」(213)

こうした指摘を素直に理解するならば、丹波篠山では、「昭和初期」に学歴主義の制度化が完成した、ということになる。事実、士族よりも学歴主義の自覚において遅れた商人家族と農民家族について、それぞれ、次のように指摘されている。

「商家と学校とのかかわりは、大まかに三つの段階を経て今日にいたっているように思われる。すなわち、「跡取りである長男は学校へ行かなかった時代」→「跡取りである長男も学校へ行くようになった時代」→「みなが学校をめざし、だれかが跡を継ぐようになった時代」。時代的には、ほぼ明治・大正・昭和に対応している。」(186)

「大正末～昭和初期生まれの世代の回想には、それまでとはちがった二つの傾向がみられる。ひとつは長男も中等教育に行くようになるということ、もうひとつは下層農家でも学歴が、自分たちの人生上の選択肢として、あるいは自分たちの生活にかかわりあうものとして、問題になりはじめたということである。そしてそれは「給料取り」の生活が、地域のなかに具体的な姿をとって広がってきたことと無縁ではない。」(199)

しかし、「昭和初期」に学歴主義の制度化が「下層農家」にまで浸透したとすれば、戦後の教育改革とその後の高校進学率・大学の進学率の急増をどう理解したらよいのだろうか。編者の天野は次のように記している。

「敗戦後、占領下にすすめられた一連の社会・経済的な改革、とりわけ農地改革が、これまで産業化の波からとり残されてきた篠山のような変化に乏しい羊農村地域についても、社会構造をゆきぶり、一挙に流動化させる役割を果たしたことはいうまでもないだろう。中等教育改革は、教育機会を拡大することにより、そうした流動化の方向をいっそう加速化させるものであった。学制改

革により、戦時期に設立された農学校、それに青年学校をふくめて、篠山の諸中等教育機関は、否応なく「新制高等学校」へと統合・再編されていく。それは学歴主義的な秩序の再編と同時に、学歴主義の制度化のいっそうの進展を結果したのではないか。」(15)

4 丹波篠山と遠州横須賀の類似点

私は、遠州横須賀で生まれ、中学卒業までそこで暮らした。私の中学時代は、1960年4月から63年3月までである。遠州横須賀は、いくつかの重要な点で、丹波篠山の歴史と似ていた。にもかかわらず、丹波篠山では「昭和初期」に下層農民にまで学歴意識が浸透し、遠州横須賀では1960年代前半においても、学歴意識は浸透していなかった。遠州横須賀で1960年代前半においても学歴意識が浸透していなかった事実は、私自身の中学生生活によって実証される。

遠州横須賀といっても、知る人はほとんどいないであろうから、『歩く旅シリーズ 東海・北陸小さな町小さな旅』（山と溪谷社、2003年、p.36）から引用しておこう。

「横須賀は、高い山がなく海が近いせいか、それとも温暖な気候のためなのか、町の雰囲気はどこか温かく、のんびりとしている。町並みは、城下町らしい町割の中に、格子造りの家や家紋入りの瓦をのせた古い商家や民家がところどころに見られるものの、往時の面影は薄れつつある。しかしこの町には、江戸末期から続く醤油屋や、幕末期、藩の策（内職奨励）により盛んに行われたという凧作りを、今なお続けている提灯屋などがあり、城下町ならではの伝統の味や職人氣質が息づいている。中央に三熊野（みくまの）神社のある狭い通りが城下町横須賀のメイン通りで、主にこの通りに職人の仕事場や伝統の味を守る店がある。」

このような雰囲気の町である。ちなみに、ここで言及されている提灯屋は柳瀬提灯店といい、柳瀬重三郎が当主である。彼は私の同級生で、小学校中学校時代を通じて遊び友達であった。柳瀬提灯店については、次のサイトを見てほしい。

<http://lgportal.city.kakegawa.shizuoka.jp/mpsdata/web/6605/p20.pdf>

それはともかく、丹波篠山と遠州横須賀の類似点は、丹波篠山も遠州横須賀も規模の小さな城下町で、産業化の波に取り残された郡部の田舎町であるという点である。丹波篠山は6万石で、遠州横須賀は3万5千石だったので、丹波篠山の方が大きかったとはいえ、遠州横須賀と比べて質的に断絶するほどの違

いではない。偶然とはいええないかもしれないが、今回の「平成の大合併」以前の人口を知るために1980年の国勢調査をみると、丹波篠山22,663人、遠州横須賀11,314人で、かつての藩の規模に対応しているかのようである。

丹波篠山も遠州横須賀も、産業化の波に取り残された小さな城下町なので、主力産業は農業と旧城下町における商業である。

歴史的・経済的に類似した城下町であるので、丹波篠山に「昭和初期」に学歴主義が確立したのであれば、遠州横須賀にも「昭和初期」に学歴主義が確立してもいいはずである。

5 「学力社会」

私の中学生時代（1960年4月－1963年3月）、遠州横須賀は学歴主義の前段階にあった。それは、「学力社会」と呼ぶのが適当であろう。「学力社会」では、「高い学力」は高い価値を有するという価値観が通用し、地域社会、教師、それに生徒自身が、ある生徒の人物評価を、もっぱら、あるいは主として「学力」を基準としておこなう。「学力社会」は、学歴主義ではない。「高い学力」の生徒が高い学歴を目ざすべきである、という価値規範は、まだ萌芽段階にある。「学力」と学歴との関係が、一義的に対応するとは考えられていない。遠州横須賀の大須賀中学校が「学力社会」であり、学歴主義にはなっていなかったことを、身をもって体現したのが、ほかならぬ私である。

中学生になると、自意識が発達する。当時、私は次のように考えていた。同年代の生徒で（といっても、遠州横須賀という狭い範囲しか念頭になかった。田舎の子が想定できる生活空間は、町に限定されていた）注目を浴びたり称賛されたりするのは、容姿端麗、スポーツ万能、明朗快活のすべて、あるいはそのどれかひとつを持ち合わせた人物である、と信じていた。不幸にして私は、そのいずれとも縁がなかった。中学時代の私は身長が平均以下で、小太りに見えた。運動神経は、平均的水準にすぎなかった。性格は、陰気ではないが、周囲の人を明るくし、話の中心になるようなタイプではなかった。

容姿端麗、スポーツ万能、明朗快活とはほど遠い私に、さらに追い打ちをかけるような悪い材料があった。一つは制服であった。もちろん学生服である。私が中学に進学する少し前に、テトロンという繊維が発売された。その当時は、テトロンの名前の由来を知らなかったが、帝人と東レが開発したポリエステルで、帝人と東レの名前を織り込みながら、しかもナイロンをもじってのネーミングであった。このテトロンの生地を使った学生服が登場した。テトロンの学生服と、それまでの木綿の学生服との違いは、私のようなおしゃれとは無関係の田舎の子供にも、一目でわかった。テトロンの学生服は、シワがなくて光沢

があった。何人かの同級生、しかも親しい同級生が、テトロンの新品の学生服を着ていた。私はといえば、兄の着古した木綿の学生服で、肘にはつぎあてがあった。いかに服装に無頓着な私でも、テトロンの学生服と並べば、なんとなくみじめな気分になった。もちろん遠州横須賀は全体として貧しい町だったので、私と同じような学生服を着ている同級生は多かった。しかし、現にテトロンの学生服を着ている同級生がいる以上、その事実は私にとってなんの慰めにもならなかった。よれよれの木綿の学生服は、私が貧しい家庭の子供であることを端的に表明していた。授業で、江戸時代には身分によって服の生地が制限されていたことを知って、深く納得した。

もうひとつの悪材料は、小学校6年生の時の行動にあった。私は6年4組であった。このクラスの男子生徒は25人ほどいたが、男子生徒が集団で担任の女性教師と対立した。対立は小学校卒業まで続き、町の教育関係者のあいだで大問題となっていた。私は中学生になるとき母親から、次のように申し渡された。町の親たちは6年4組の男子生徒を毛嫌いしており、中学校に、ウチの子を6年4組の男子生徒と一緒にクラスにするな、と申し込んだため、中学校は大いに困った。しかし、元の6年4組の男子生徒をひとまとめにしておくこともできず、強硬な親たちをなんとか説得した。6年4組の男子生徒の中でも、正實は騒動の中心人物の1人と見なされているので、世の親たちはとくに正實を嫌っている。そのことを肝に銘じておけ、というものであった。

私は納得できなかった。6年4組紛争の非は、私は女子のみがかわいいので、男子なんかはどうでもいいのだ、と公言し、かつそれを実行した女性教師にあるのであって、男子生徒が非難される理由はないと思っていた。さらに、私が騒動の中心人物の1人であるという評価もおかしいと思った。騒動には中心人物などいなかった、と思っていたからである。このように納得しないものの、しかし世の親たちが私を厳しい目で見ていることは理解した。

さえない個性、みすぼらしい身なり、おまけに問題行動の札つき生徒である、というのが、中学生になった私の自画像であった。中学生ともなれば異性のことも意識しはじめるが、中学3年間を通じて、私に積極的に話しかけるような女子生徒はいなかった。田舎町なので、男子生徒と女子生徒が公然と交際する雰囲気はなかった。それでも、少しは声をかけてくれてもいいのではないかと、思っていた。しかし、これだけさえないのであるから、声がかからないのも当然であろう、と思った。

そんな私にとって、私の描く自画像がかならずしも正しくはないのではないかと、思えるようなことがいくつかあった。その一つは、私が同級生の家に遊びに行ったとき、彼の母親から、「正實くん、ウチの子と遊んでやってね」といわれたことである。はじめてこの言葉を聞いたときには、世の親たちに嫌わ

れているはずの私に、なぜこんなことを言うのだろう、とじつに不思議であった。しかし他の同級生の親からも似たようなことを言われ、私は、世の親たちに嫌われてはいないのではないかと、思いはじめたものの、なぜ私への評価が180度変わったのか、理解できなかった。

また、私が同級生と一緒に悪いことをした場合、教師は、同級生を強く叱責しながら、私を叱ることはなかった。中学生時代を通じて、私は教師から叱責された記憶がない。私は模範的な生徒ではなかった。私は、教師のいうことを何でも聞く素直な生徒ではなかった。同級生といっしょに悪ふざけもおこなった。それなのに、教師は私を叱責しなかった。明らかに私をえこひいきしていた。同級生から面とむかって、「マサミは先公のみこだら」、と言われたこともあった。遠州横須賀弁を使わなくなって45年にもなるので、遠州横須賀弁の正確さは保証しがたいが、たしか遠州横須賀弁でこのように言われた。「みこ」は *teacher's pet* の意で、そんなものに墮してしまったのか、という強い非難のニュアンスがある。標準語に訳すと「マサミは *teacher's pet* に成り下がってしまったのではないか」というような内容である。「みこ」と言われて、オレはそんなんじゃない、と反発した。しかし、中学生時代、たしかに教師は私を叱らなかつたし、私に何かを指図することもなかつた。なぜ教師が私に甘いのか、理解できなかった。

さらに、何人かの下級生の女子生徒が私とすれ違うとき、私の方をじっと見て、その後、どうも私の噂をしているかのような態度を示したことも何度かあった。悪い噂ではないことは、その態度から分かった。しかしなぜ私が噂の対象になるのか、私には理解できなかった。

こうしたことがあったものの、中学3年間を通じて、当初からいただいていた私の自画像は基本的には変わらなかつた。

私の自画像とは齟齬するいくつかの事態について、すべての疑問が解けたのは、中学校の卒業式の日であった。一緒に過ごすのは今日が最後という興奮した雰囲気の中で、それまでの日常的会話では話されなかつたことが、卒業式の日に話された。同級生と話をして私は、私がおっぱら「頭がものすごくいい」という評価を受けていたことにはじめて気づいた。「頭」以外の評価はなく、野村＝「いい頭」、という等式が成立していたかのごとくであった。

その当時、学校はほとんどの試験の結果を公表していた。上位何名までであったのかは覚えていないが、成績上位者の点数を壁に張り出した。上位50名だった、と聞いた記憶もある。そうだとすると、学年は350名ほどだったので、上位1/7ということになる。

成績上位者が張り出されると、私はいつもトップであった。私は、試験結果がいつもトップであることを、別にどうとも思っていなかつた。一番になりた

いと思って勉強し、一番になったのであれば、誇らしくもあり、意味あることであつたであろう。しかし、トップになりたいと思って試験勉強したことはなかった。試験がおこなわれた、結果を見たら私がトップだつた、また試験があつた、結果を見たらまた、という日常的サイクルにすぎなかつた。

また、私は、試験でいつもトップであつたことをほめられたことはなかつた。教師も私の親も、よくやった、立派なものだ、などとはいわなかつた。親が私をほめなかつた理由は、後述する。私もまた、トップであることは親や教師からほめられてしかるべき価値あることである、と思つていなかつたので、ほめられたい、などとは思わなかつた。

しかし、卒業式の日には私は理解した。世間は、私の試験成績が一番であることをとても高く評価していたのである。容姿端麗ではなく、スポーツ万能ではなく、明朗快活でもない私が、試験の成績が良いという理由だけで、同学年だけではなく、下級生にも知られている、とわかつた。問題児とされていた私が、同級生の親から「ウチの子と遊んでやってね」といわれたのも、ひとえに私の成績のせいであつた。教師は、私をほめなかつたが、成績のゆえに私をいわば特別待遇した。さらに、女子同級生からこういわれた。「正實クンみたいに頭のいい人に、怖くて話なんかかけられへんに。」思つてもみなかつた論理に、私は絶句した。

こうして、中学校の卒業式の日には、私ははじめて、トップの成績は私にかんするすべてのマイナス要素を帳消しにただけでなく、きわめて高い評価をもたらすことを知つた。しかし時すでに遅く、それからまもなく、私は高専の落ちこぼれとなつてしまつた。つまり、私の中学時代は、「頭がものすごくいい」といわれ周囲から畏敬された生涯唯一の時期であつたが、本人はそう評価されることの価値を認識できず、むなしく日々を送つていたのである。

それはともかく、以上のことからわかるように、「高い学力」は遠州横須賀においても人物評価の重要な、あるいは最重要の評価項目になつていた。その意味で、遠州横須賀において、1960年代前半に、「学力社会」が成立してゐた。しかしそのことは、学歴社会の成立を意味していなかつた。

6 遠州横須賀の学校事情

ここで、遠州横須賀における学校事情を説明しておく必要がある。

私が生まれた1948年1月には、遠州横須賀は静岡県小笠郡横須賀町であつた。1956年に大淵村と合併し、大須賀町となつた。

大須賀町には、小学校2校（町立横須賀小学校、町立大淵小学校）、中学校1校（町立大須賀中学校）があつた。旧城下町である狭義の横須賀に生まれた

子供（私はその一人である）は全員例外なく横須賀小学校に通い、それから大須賀中学校で学ぶ。大淵地区の子供は大淵小学校を卒業してから大須賀中学校に入ってくる。狭義の横須賀の同級生は、9年間、ずっと同じメンバーである。住民の転入転出はほとんどなく、私の記憶では、小学校の時に警察署長の息子が転入してきた。われわれ田舎の子供とはどこか違った上品な雰囲気であったが、何年かして転出していった。

横須賀の子供が別々の学校に通いはじめるのは、高校生になる時である。普通高校は3校であった。県立掛川西高等学校の開校は正式には1901年の静岡県立掛川中学校であるが、その源は1877年の私立学校にまでさかのぼることができる。県立掛川東高等学校は、1903年の掛川女学校を出発点とし、1923年に静岡県立掛川高等女学校となり、戦後に掛川東高等学校となった。私が中学生時代、この学校は女子校であった。もう一つの普通高校は、地元横須賀の県立横須賀高等学校で、地元では通常、横高（よここう）と呼んでいる。

戦前には、遠州横須賀に実業補習学校はあったものの、正系の中等学校がなかった。『大須賀町誌』（p.281）は、「大正及び昭和のはじめには中等学校建設基金がかなりの額まで積み立てられていた。しかしこの基金を別途に利用したらとの意見も出て思わぬ紛争を巻き起こし、結果的には学校建設が不能という事で終わった」、と記述されている。

戦後、高等学校の誘致活動がおこなわれ、1948年に県立池新田高等学校横須賀分校定時制課程ができた。それが1950年に横須賀町外2ヶ村組合立横須賀高等学校定時制課程となり、さらに1951年に県立横須賀高等学校定時制課程となった。悲願の全日制高校は、1952年に県立横須賀高等学校全日制課程普通科設置認可として実現した。そして1954年に定時制課程を廃止し、横高は全日制のみとなった。

掛川西高、掛川東高、横高の3普通高校のうち、掛川西高はいわゆる進学校であった。掛川東高と横高からの大学進学者数は限られていた。

実業高校は地元にはなく、浜松工業高校、私が中学を卒業する年に新設された中遠工業高校（現・掛川工業高校）、袋井商業高校、磐田農業高校が主なところであった。

私に直接関係する学校として、工業高等専門学校（高専）について触れておかなければならない。高専は、6・3・3・4制の学校制度の枠外に作られた学校で、中学卒業生を受け入れ、5年間で「中堅技術者」を養成することを目的としていた。高専は、手短かにいってしまえば、高度成長期に予想された技術者不足に対応するため、技術者を短期で養成しようとした学校である。1962年4月に国立12校、公立2校、私立5校でスタートした。ご都合主義的に作られた学校であるため、理念も設備もカネもなく、ヒトもいなかった。それにもか

かわらず、設立当初、政府はあたかもすばらしい学校制度ができたかのように宣伝した。セールスポイントは、中卒者への5年間の教育なので、卒業生は本来ならば短大卒と同等の待遇になるはずが、専門教育密度が濃いので、高専卒業生は四年制大卒と同じ待遇になる、というものであった。この点は後に真っ赤なウソと判明したが、設立当初はもちろん卒業生がいないので、このウソがまかり通った。そのためもあって、設立後数年間は、どこの高専においても、入学の競争倍率が10倍を超える難関となった。私が受験した沼津工業高等専門学校は、最初に作られた国立高専12校のひとつである。沼津市は静岡県 of 東部にあり、西部に住む私にとって自宅からの通学は不可能であった。

7 遠州横須賀における学歴主義の未成立

遠州横須賀において、1960年代前半に、「学力社会」が成立していた。しかし、学歴主義は制度化されていなかった。学歴主義が制度化されているならば、人々は、高い学歴が高い社会的地位をもたらすものと認識し、できるだけ高い学歴を取得しようとするはずである。

私は沼津高専と掛川西高の両方に合格した。掛川西高はいわゆる進学校であり、大学にリンクしている。沼津高専は五年制の教育機関であり、修業年限としては高校をへて短期大学を卒業した場合と同じになる。四年制大学と比べて明らかに不利である。また、高専は新設されたばかりの学校であり、伝統ある大学とは比較にならない。つまり、学歴主義が制度化されていたならば、私は掛川西高に進学し、「いい大学」に入学したいと思ったであろう。また、学歴主義が制度化されていたならば、教師は私に、掛川西高への進学を勧めたであろう。とにもかくにもトップの成績であったのだから、教師が私に、掛川西高に行って勉強すれば「いい大学」に進学できるぞ、がんばれ、と言ってもいいはずである。しかし、現実には、教師、親、友人のだれ一人として私に掛川西高への進学を勧めなかった。そして私自身も、沼津高専に行くことを当然だと思っていた。

まず私自身のことをいえば、大学進学の話は、ほとんどまったく考えなかった。たしかに、私は両親から、「うちには正實を大学にやる余裕などありやあせん」とはつきり宣告されていた。しかしそう言われていたから、私が大学進学を考えなかったのではない。私にとって大学ははるかかなたの世界であり、イメージすらわかかなかった。大学で何をどう学ぶのか、大学生はどのような生活を送るのか、大学を卒業するとどのような職業生活が待っているのか、想像できなかった。大学は私とは関係のない世界であった。「いい大学」に入りたい、そのために掛川西高に進学しなければならない、という考えは私にはなか

った。

私が沼津高専と掛川西高の両方に合格したあと、私は校長に呼ばれた。校長は私にこう言った。「沼津高専に合格してよかった。小笠郡で合格したのは、キミだけだ。私はとてもうれしい。掛川西高にも優秀な成績で合格しているが、掛川西高の合格は私が取り消しておいた。」私は、いくらなんでも本人に無断で掛川西高の合格を取り消すのは越権ではないか、と思ったが、すぐに、まあ、掛川西高の合格を取り消すかどうか、と事前に相談されても、取り消しますと答えるのだから、結果は同じであり、あえて校長に文句を言うこともないだろう、と考えて、何も言わなかった。校長にとって、私が高専に進学すること、つまり大学にいかないことは、当然のことであった。私が沼津高専を受験した1963年は、沼津高専が発足して2年目であり、私が受験した電気工学科の競争倍率は12倍であった。難関とされていた高専の入試を小笠郡でただ一人クリアした生徒を出したのであるから、校長が喜んだことは理解できる。しかし、試験に合格したからといって、高専に入学する必要があるわけではない。高専に合格してキミの学力は分かった、これから掛川西高でもっと勉強して、「いい大学」に入りなさい、というアドバイスもありえたはずである。しかし校長以下、教師の誰ひとりとして、私にそういうアドバイスをしなかった。

同級生で掛川西高に進学した男子生徒とは、濃淡はあるものの、ほぼ全員とつきあいがあった。彼らとはいろいろな話をしたはずであるが、ともに頑張っで大学に行こう、などという話をした記憶はない。私と同じく、彼らにとっても、大学というのは遠い世界のことであった、と思われる。したがって当然、誰ひとりとして私に、掛川西高から大学進学之道を選んだほうがいい、などと忠告しなかった。

私が学歴主義的な発想にはじめて触れたのは、沼津高専1年生の時である。数学の教師が、授業中に、「私があなたがたに大学受験を指導すれば、あなたがた全員を東大に合格させることができるのですがね」と発言した。高い学力を持った生徒がこんな高専などという学校にいるのはじつに残念である、というニュアンスが露骨に出ていた。私はこの発言に強い違和感を持ち、その後もずっと記憶することになった。大学に行く気がないから高専生になったのに、なぜ大学進学のことを話題にするのだろうか、と思ったのである。高専を中退した後で、私はこの数学教師の発言を思いだして、彼がああいう発言をしたのは、彼にとってはごく自然な発想であった、と思うようになった。彼は沼津高専に来るまでは、静岡県で1、2を争う進学高校の教師であった。彼にとって、学歴社会の存在は自明のことであった。彼の目から見て、高専生は、本来ならば学歴社会において高い地位を獲得できるはずの学力を持っていながら、そうした学歴社会からはみ出てしまったかわいそうな存在と見たのであろう。ちな

みに彼は、6年ほど沼津高専に勤務した後、静岡大学教養部に移っていった。

8 進学高校の意義

大学に進学する気がないというのであれば、なぜ野村は進学校である掛川西高を受験したのか、進学校を受験するのは、大学に行きたいからであろう、という疑問に答えておこう。この疑問は、都市部ではもっともな疑問であるが、遠州横須賀には当てはまらない。遠州横須賀と、そしておそらく小笠郡の中学校はすべてそうであると思われるが、大学に行きたいから進学高校である掛川西高を受験する、という構造にはなっていなかった。大学への進学希望とは関係なく、掛川西高に合格しそうな大須賀中学校の成績上位者はほぼ全員、掛川西高を受験するという不文律というか慣行というか、そういうものがあつた。なぜこのような慣行ができたかを推測すると、次のような理由からではないかと思われる。

小笠郡の中学校にとって、入試難易度がもっとも高かつたのは、掛川西高であつた。間違いなく、中学校の校長や3年生担当の教師にとって、何名を掛川西高に送り込むことができたかは、その学校の学力を示す指標であつた。中学校の機能のひとつは学力養成にあるので、掛川西高に合格できそうな成績上位者はほぼ全員、進路指導として掛川西高を受験させた。おそらく、横須賀中学校が1947年に創立された直後から、このような進路指導がなされたと思われる。毎年このような進路指導がなされると、生徒は自然に、成績上位であれば掛川西高を受験する、と思ひ込むようになる。

ここで重要なのは、大学進学との関係である。都会の中学校で学んだ人たちは、大学に進学したいので進学高校を受験する。ところが遠州横須賀では、中学校の成績上位者が、大学進学の希望とは関係なく、進学高校である掛川西校を受験する。もちろん生徒は、掛川西高が進学校であり、大学にリンクしていることは知っている。しかし、掛川西高に進学した同級生は、だれも大学について具体的なイメージをいだいていなかった。だから、同級生のあいだで、大学の話などまったく出なかった。遠州横須賀の子供が大学について具体的な情報に触れ、大学のイメージを形成するのは、掛川西高に入学してからになる。つまり、大学を受験するために進学高校に入学するのではなく、進学高校に入学したから、大学受験を真剣に考えるようになる。学歴主義に身近に接するのは、掛川西高に入学してからである。大須賀中学校の教師は、「いい大学」にいかなければならない、そのためには掛川西高に入らなければいけない、などとは決していわなかった。大学進学とは切れた形で、成績上位者を掛川西高に送り込んだ。

しかしそれにしても、掛川西高に何人を送り込むかという中学校間の競争があれば、その競争は必然的に中学校を受験体制の中に組み込むことになり、それは学歴社会に接続していくのではないか、という疑問が出るかもしれない。遠州横須賀では、そうはならない。掛川西高に進学するのは、ごく一部の生徒に限定されているからである。私の学年は、例外的に勉強のよくできる学年だといわれた。その学年で掛川西高に進学したのは、男子生徒 166 人のうち 18 人 (10.9%)、女子生徒 181 人のうち 3 人 (1.7%) で、合計では 347 人中 21 人 (6.1%) にすぎなかった。これでは、掛川西高への受験教育を学校の主たる目標とすることはどう考えても無理である。また、私の学年で全日制の高校に進学したのは 174 名で、卒業生のちょうど半数であった。就職斡旋もまた中学校の中心業務であった。大須賀中学校の教育目標は、成績上位者の学力をさらに引き上げることにあったのではなく、落ちこぼれを出さない教育、全体の底上げをはかる教育であった。

9 関係者全員を幸せにした私の沼津高専合格

私が沼津高専に合格したことは、大須賀中学校にとっても、私の両親にとっても、私自身にとっても喜ばしいことであった。

私が受験した当時、沼津高専の入試競争率は 10 倍を超え、入試難易度からいえば、掛川西高よりもずっと高かった。大須賀中学校にとっては、掛川西高に何名かを進学させるよりも、「小笠郡ただ一人の沼津高専合格者」を出したことは、誇りであった。校長は、卒業式の式辞でわざわざ、「本学から沼津高専合格者を出した」と言及したほどである。もともと大学進学を念頭に置いて高校への進路指導をおこなってはいなかったのも、高専という制度が大学と接続していないことなど、校長はまったく気にしていなかった。

ついでに言うておけば、大須賀中学校の教師の大半は、師範学校出身のはずであった。全国レベルでいえば、新制中学校ができるまで、教員の確保が問題となった。文部省『学制百年史』(721 頁)によれば、「教員の約半数は国民学校からの転任により、その他は青年学校や中等学校からの充足によってまかなわれた」。遠州横須賀の近辺で中等学校といえば旧制掛川中学と掛川高等女学校であるが、その教師の大半は、新制の掛川西高と掛川東高の教師になったはずであり、たとえ新制中学の教師になった者がいたとしても、掛川市内の中学校に就職できるはずであり、わざわざ小笠郡の田舎中学に赴任するはずがない。たしかに、1949 年の教育職員免許法によって、新制中学校の教員は大学卒業者に限られるようになった。そして、私が中学生であったとき、大学卒業者と思われる若手教員がいた。しかし、学校運営の実権を握っていた年配の教師は、

まちがいなく師範学校出身であった。自分自身が高等教育の経験がなく、しかも大学への進学率がきわめて低い田舎の中学校にいれば、自分の教えている生徒と大学の間を考えるとなどなかつたであろう。このこともまた、遠州横須賀における学歴主義の未成立に寄与していたと考えられる。

私の親は苦慮していた。本音をいえば、私を工業高校に進学させたかった。大学はどうてい無理だが、高校までであれば、なんとか経済的にやりくりもできる。高校であれば、工業高校である。手に職がつくからである。しかし他方、当然、大須賀中学校では成績上位者は掛川西高を受験することになっているという慣行を親は承知していた。成績トップの私を掛川西高ではなく工業高校に行かせるということは、「世間体」を気にしていた親にとって、できないことであつた。けれど、正實が掛川西高に行けば、大学に行きたいといいだすかもしれない、と恐れていた。かといって、掛川西高を出て就職すれば、掛川西高は普通科なので、手に職はつかない。これでは正實の将来が不安である。正實の試験成績がしかるべき工業高校に合格する程度であればよかつたのに、というのが私の親の本音であつた。親にとっては、私の成績がトップであることははなはだ迷惑な話であり、親が私の成績をほめることなど、ありえないことであつた。

私の親にとって救いの神となつたのが、沼津高専である。設立後2年目の沼津高専は、静岡県で入試難易度がもっとも高い学校であつた（と、中学の教師はいつていた）。その学校に進学するのであれば、私が掛川西高に進学しないことを世間は非難しないであろう。高専で学べば、5年間で「中堅技術者」になり、手に立派な職がつく。問題は、高校3年間よりも2年長い在学期間であるが、私は日本育英会の特別奨学金が内定しており、この特別奨学金と寮生活によって、なんとかコストの安い学生生活を送れるだろう、と親は判断した。親は私に、「マサミは本当は高専にも行けやあせんだが、先生からもいろいろ言われとるし、それにマサミは末っ子だもんで、無理に無理をして行かせてやるだに。そのことをいつも覚えていなきやいかんに」と何度も念を押した。

私はといえば、手に職をつけないければいけないと信じており、「中堅技術者」ならば立派な手に職だ、と思つた。しかも当時のプロパガンダでは、高専卒業生は大学工学部卒業生と同じ待遇になる、といわれていたので、修業年限が2年短いにもかかわらず大学卒業生と同じ待遇になるとは、棚からぼたもちのような話だ、と大きな期待をいただいた。私は喜んで沼津高専に行った。決して、家の経済状況が大学進学を許さないのに、泣く泣く掛川西高と大学進学をあきらめ、沼津高専に行った、というのではない。

学歴主義の観点からみれば、高専はじつに中途半端な学校であり、高い学力を持った生徒がいくべき学校ではない。高い学力を持った生徒が高専に入学し

たことは、沼津高専の数学教師が明言したように、道を誤っている。しかし、学歴主義が未成立で、「手に職」意識が強い田舎町においては、高専という中途半端な学校こそが、すばらしい学校に見えた。工業高校よりも立派な「手に職」が身につく、しかも4年制大学卒と同じ待遇というのであるから、「手に職」派にとっては、それこそ最高の学校であった。私の沼津高専合格は、私と私の周囲みんなをととても幸せな気分にしたのである。

10 沼津高専での生活

沼津高専での最初の1年間は、楽しかった。高専はしっかりとしたプランのもとに設立されたのではなかった。思いつきにもとづいて急造された。そのため、沼津高専の1期生が入学したとき、校舎すらなかった。中学校の一部を間借りして授業をおこなった。寮は、沼津市が夏の学校として使っていた臨海寮を借り受けた。私が2期生として入学したときは、校舎はとりあえずは建設されていた。校地内に建設中であった寮も、一部が使えるようになった。そこで1期生は臨海寮を出て校地内の寮に移った。われわれ2期生は、1期生が出ていった後の臨海寮に入った。臨海寮から学校まではかなりの距離があり、バスで通学した。君たちの同年代の高校生は生徒です、君たちは学生です、学生は自分のことを自主的に決めます、と学生主事がいったとおり、学校でも寮でも、思うことができ、とても楽しかった。高専に入学してよかった、と心から思っていた。

ところが2年生になったとたんに、高専生活は惨憺たるものとなった。2年生になるとともに、校地内の寮に移った。それとともに、学校側による学生の徹底した管理がはじまった。ずっとあとになって知ったのだが、もともと高専教育は徹底した管理教育を目ざしていた。ところが設立当初は、校舎すらなかったことに象徴されているように、あらゆる面で不足していた。そのため管理教育をおこなう余力がなかった。それを知らなかった私が、学生だから自由に自己決定できるのだ、これが高専の良さだ、と思っていたのである。設立3年目に入って、沼津高専は、ようやく体制がととのってきた。それは、管理教育がはじまることを意味した。管理教育は、寮においてよりいっそう徹底した。臨海寮では、畳1畳ほどしかなかったとはいえ、ともかくもカーテンでプライバシーを確保できた。ところが新しい寮は、1部屋にたしか8人で、だれが何をしているのかは、一目瞭然となっていた。それはまだ我慢できた。問題は、寮長以下、すべての寮役員が学校側によって任命された。選ばれたメンバーは、学校の命令を素直に実行する連中だけであった。いわばこの連中が、学校側の命令を寮生に押しつけ、そのみならず、寮生の行動を学校側に報告している

と考えられた。寮生は、学校においても寮においても 24 時間監視されるようになった。私は本当に窒息死するような息苦しさを覚えた。

1 年生のときはあれだけ自由であったのに、なぜ 2 年生になってからこんな監視体制下におかれなければならないのか、理解できなかった。そして、管理教育を押しつける教員連中を嫌悪した。それとともに、こうした教員連中が教える専門科目が大嫌いになった。私は高専教育から完全に落ちこぼれた。電気工学は嫌だ、社会と人間を知るため社会科学を勉強したい、と強く思い、高専を中退して大学に行こうと決意した。私が高専を中退したのは、高専の学歴ではだめだ、大学の学歴をほしい、と思ったからではない。ひたすらに管理教育に反発し、電気工学が嫌いになったからである。

高専という環境の中で、大学とはどういうところか、具体的に知る手立てがなかった。なんとか大学のことを知ろうとして、朝日ジャーナル編集部[1964]『大学の庭』上下（弘文堂）を買ってきて、何度も何度も読んだ。話は少しそれるが、この本はいい本であった。まだ大学を愛する「大学人」というものが存在し、その「大学人」が主要な大学を訪問し、その大学についてかなりくわしく書き記したものであった。『朝日ジャーナル』は、大学紛争が一応おさまったあと、いわばその後の『大学の庭』を探訪する形で、シリーズ連載した。これはひどかった。悪意ある文章が羅列されているという感じであった。さすがに編集部もこれはひどいということがわかったらしく、このシリーズは単行本にはならなかった。

11 高専中退後

高専を中退した者が大学受験資格を持つかどうか、文部省は当初、中退者を想定していなかったもので、文部省の見解はなかった。しかし全国の高専で、中退して大学受験したいという 1 期生が少しずつ出はじめて、文部省は、高専 3 年間の単位全部を取得した中退者は大学受験資格を持つ、と発表した。高専 2 年生の私は、即座に高専を中退して大学入学資格検定（大検）によって大学受験資格を取得するか、高専 3 年生になって単位を取得して受験資格を獲得するか、選択を迫られた。高専の一般教育は普通高校にくらべて科目数も少なく、かつ浅かった。大学入学資格検定に合格するためには、高専では習わなかった科目を数多く勉強しなければならなかった。そのため大検よりも、なんとか高専 3 年生の単位を取る方が容易ではないか、と思った。すでに大嫌いになっている電気工学の単位を取るのは苦痛であったし、普通高校の生徒にくらべて受験勉強に大きなマイナスであった。このときの気持ちは、崖っぷちに立たされているという意識と、それでもなんとかなるのではないか、という気持の入り

まじったものであった。

私は、「現役」(?)で某地方国立大学に合格した。しかしこの大学への入学を辞退し、浪人することにした。辞退した理由は、なんだ、そんなつまらない理由で辞退したのか、といわれることが間違いないような理由からであった。たしかに客観的にはつまらない理由であったが、私にとってはそれなりの理由であったと思っている。

私が高専を中退した年は、当然、中学校時代の同級生が大学に合格した年でもある。遠州横須賀としては異例のことに、東京大学法学部や京都大学工学部への合格者が出た。このことは大学とは縁の薄い田舎町でも大きな話題になった。そして、東大法学部に受かった同級生は、その昔、私と同じく横須賀小学校6年4組の生徒であった。まだ私のことを頭のいい子だと記憶している大人たちも多く、このことと考え合わせて、かつての6年4組の紛争は次のように解釈されるようになった。「6年4組ん衆はものすごく頭がよかつただもんで、あんなことをやっただよ。頭がよくなきゃ、あんな大変なことなんかできやあせんだに」。(revisionism!)

大須賀中学校の1963年卒業生が町の大きな話題になればなるほど、私は肩身の狭い思いをした。つい3年ほど前までは「とても頭のいい子」と思われていた私は、学校教育から落ちこぼれ、浪々の身となっていたからである。某地方国立大学に合格した上で浪人することにしたので、ヘッセ『車輪の下』の主人公ハンスほどではなかったにしても、零落、落魄などという言葉が思い浮かび、境遇の激変を身にしみて感じた。上田敏の訳詩「げにわれは うらぶれて ここかしこ さだめなく とび散らふ 落葉かな」は感傷的すぎるとしても、うらぶれた、という感じを強く持った。私にとって遠州横須賀はとても居心地の悪い場所になった。私は、遠州横須賀から遠ざかった。

12 郡部における学歴主義の成立と未成立

以上のような私の個人的体験から、私は、1960年代前半において遠州横須賀には学歴主義が未成立であったことを確信している。そして、1960年代前半における学歴主義の未成立は、遠州横須賀に限られたことではなく、広く全国的に見られる、と思っている。そのことを裏づける文献も存在する、と考えている。

と、私がこのように力まなくても、じつは、編者の天野が、ほかならぬ本書において、私の主張と同じ見解を記している。

「意外に思われるかもしれないが、学歴主義や学歴社会は、教育社会学にとっても、きわめて新しい用語である。さすがに1986年刊の『新教育社会学辞典』

には収録されているが、1967年刊の『教育社会学辞典』（いずれも東洋館出版社刊）では、索引にも、この語をみることができない。このことは、学歴主義や学歴社会という用語を使って説明されねばならない現象——私たちが学歴主義の制度化とよんできた現象が、1960年代以降急激に進行し、研究者の関心を強くひきつけるようになったことを示唆している。戦後改革は、学歴主義の制度化の完成にむけて、いわば「地ならし」の役割を果たしたのではないか。」(15)

この文章は、いわば唐突に本文に挿入されている。本書の執筆者たちは、天野自身も含めて、この文章に注意を払っていない。この文章は、丹波篠山のような産業化に取り残された田舎町に、「昭和初期」という早い時期に学歴主義が社会層を問わず浸透したことを当然視する本書の主張と、明白に齟齬している。私の個人的経験と、それと符合するこの文章からすれば、次のような問題設定がなされるべきであった。すなわち、丹波篠山のような産業化に取り残された田舎町に、なぜ「昭和初期」という早い時期に学歴主義が社会層を問わず浸透したのか。

この問いにたいする私の答えは、次の2点である。第一に、丹波篠山に、田舎町としてはきわめて早期に中等学校が設立されたことである。第二に、その中等学校に早くから子弟を送りこんだ上級・中級士族と地方名望家が存在していたことである。

まず第一の点から見ていこう。

本書の著者たちは、鳳鳴義塾がいかに正系の中学校と異なっていたのかを強調している。たしかに、軍人養成の漢学塾という鳳鳴義塾の出発点は、正系の中学校とは教育内容も校風も大きく違っている。しかし注目しなければならないのは、鳳鳴義塾が正系の中学校と異なっていた部分ではなく、正系の中学校と共通した部分である。本書88頁に掲げられている「表I-10 時期別の卒業生数と進学率」によれば、1920年に県立鳳鳴中学校になる以前に、鳳鳴義塾は、すでに立派な高等教育への進学校であった。私立鳳鳴義塾時代(1885-1898年)に、卒業生数49名、進学者数29名(59.2%)、私立鳳鳴義塾中学校時代(1899-1919年)には卒業生数603名、進学者数301名(49.9%)であった。進学先は、当初は塾設立の目的に沿って軍学校が多かったが、次第に多様化し、県立中学校に移管する直前の私立中学校後期(1913-19年)では、官立公立専門学校26.7%、小学校教員養成の師範二部25.5%、私立大学16.8%、官立公立大学14.3%であった(90)。鳳鳴義塾はれっきとした中等教育機関であり、高等教育とリンクしていた。

市部と郡部の区分は、歴史上のどの時点をとるかによって、ある地域が郡部にもなり、市部にもなる。私の考えでは、戦前の市部と郡部の区分は、市の要件を厳しくしていたため、市部と呼ばれてよい地域が郡部に区分されてる。最近のいわゆる「平成の大合併」以後では、逆に、郡部と呼ばれるべき地域が市

部に吸収されたり（たとえば掛川市による遠州横須賀の吸収）、あるいはいくつもの町が合併して市と称していてもその実体は郡部と呼ぶほうが適当であったりする。1950年代の「昭和の大合併」から21世紀初頭の「平成の大合併」に至るまでの時期における市部と郡部の区分が、都市機能の有無に即応しており、市部と郡部の区分として適当である。そこで、以下においては、市部と郡部の区分をこの意味において使用する。

ちなみに、私が市部と郡部の格差を実感したのは、1967年に横浜国立大学経済学部付属の富士見寮に入寮したときである。寮なので、当然、横浜・東京以外の地方出身者が集まっていた。入寮して私がすぐに気づいたのは、地方出身者とはいえ、私の知る全員が、山形県酒田市、静岡県富士宮市、長崎県長崎市、新潟県高田市など、市部の出身者であった。沼津高専では、市部出身者もいれば郡部出身者もいて、郡部の出身であることはとりたてて言うべきことでもなかった。ところが横浜国大では郡部出身者であるということは、珍しいことであった。私は、大学と高専、市部と郡部の違いを実感した。

旧制中学校の数は、1893年から1903年の10年間に、74校から269校へと3.6倍に急増した。米田俊彦[1992]『近代日本中学校制度の確立——法制・教育機能・支持基盤の形成——』（東京大学出版会、121-125）は、1904年時点における中学校267校の分布状況を、道府県別に、かつ所在地の人口の大きさごとに示している。所在地の人口の大きさは、1万人未満、1万人以上、2.5万人以上、5万人以上、という区分である。所在地の人口の大きさごとに中学校の分布を示したのは良い着想であるが、区分の仕方には問題がある。「1万人未満」を一括し、それを「農村地域」としている。そして101校(37.9%)が「農村地域」に所在することをもって、「1890年代前半の「一府県一中学校体制」下では都市に集中していたのが、人口の少ない農村地域の町村を中心に増加した結果1900年代には都市から農村にかけて広く分布するようになった」(126)と指摘している。この指摘は正しいとはいえない。米田が1万人未満の「農村地域」として一括している町は、上述の私の区分に従えば市部に区分けされなければならない町村を数多く含んでいる。中学校の所在地を、私の区分に従って市部と郡部とに分けるならば、郡部に所在したのは267校のうちわずか21校にすぎない。とても「1900年代には都市から農村にかけて広く分布するようになった」とはいえない。

鳳鳴義塾は、郡部に所在した21校のうちの1校である。丹波篠山は郡部でありながら、例外的に、高等教育とリンクした中等教育機関を持っていた。丹波篠山の町民は、中等教育・高等教育がどのような社会的地位をもたらすのか、間近に観察することができた。

他方、遠州横須賀には中等教育機関がなかった。戦後、1952年によく全

日制普通科の横須賀高校が遠州横須賀に設置されたが、横高は、高等教育にリンクしているとはいえなかった。遠州横須賀の子供が受験できる進学校は、掛川西高であった。掛川は、遠かった。掛川に行くには、まず軽便鉄道で10キロ離れた袋井駅に出る。軽便鉄道はパワーがなく、しかも駅が多いので、30分かかる。袋井で東海道線に乗り換え、およそ9キロ、時間では7分ほどで掛川駅に到着する。乗り換え時間を含め、1時間ほどの通学となる。田舎の子供には田舎の子供としての距離感覚、時間感覚がある。距離にして19キロ、時間にして1時間ほどの通勤通学は、田舎の子供にとっては長い距離、長い時間をかけての通学であった。また、町として掛川市と遠州横須賀は、ほとんど何の関係もなかった。遠州横須賀と掛川市を往復しているのは、数少ない掛川西高生と掛川東高生だけであった。

私の中学生時代でも、掛川は遠い町であり、掛川西高に進学した遠州横須賀の子供は、いわば、遠州横須賀からいなくなってしまうも同然の存在であった。1960年代前半においてもこのような感覚であったから、戦前においては、掛川中学校は遠州横須賀の住民にとって、遠いとおい存在であったろう。

つまり丹波篠山においては、郡部としては異例な早さで高等教育とリンクした中等教育機関が設立された。そのことは、住民をして中等教育をごく身近に感じさせ、しかも高等教育を *visible* にした。遠州横須賀においては、中等教育機関が存在せず、中等教育そのものが *invisible* であり、まして高等教育など想像できない世界だった。このことが、丹波篠山においては「昭和初期」に学歴主義が浸透し、遠州横須賀においては、1960年代前半になっても学歴主義が成立しなかった最大の理由である。

第二に、丹波篠山における士族と地方名望家の存在である。社会層のなかで、士族がいち早く学歴を志向したことはよく知られている。丹波篠山においてもまっ先に鳳鳴義塾に子弟を送り込んだのは士族であった（第Ⅲ部第1章）。

遠州横須賀も横須賀藩3万5千石の城下町であり、士族がいち早く学歴を志向しても当然のように思われるが、そうはならなかったと思われる。江戸時代最後の将軍徳川慶喜が隠退し、徳川家達が徳川宗家を継ぐと、家達は駿府の大名となった。彼は駿府を静岡と改名し、静岡藩が成立した。横須賀藩は静岡藩に含まれることとなった。そのため、横須賀藩を180余年にわたって治めてきた西尾家は、1869（明治2）年安房花房に所替えとなった。西尾家とその家臣がいなくなったあと、江戸に住んでいた旗本、御家人が無禄を覚悟で横須賀に移住してきた。その数は680名ほどといわれている。1873年の家禄奉還にともなって、「多くはこれにより農業その他の業に転じ、あるいは資金を得て生活を立て直すべく旧住所の東京へ戻って行った」（『大須賀町誌』100）。

士族は、いち早く近代的学校制度によって学歴を身につけ、立身出世した。

しかし、士族一般がそうしたコースをたどったのではない。上級武士、中級武士、下級武士という階層ごとに大きな差があった。園田英弘/濱名篤/廣田照幸 [1995]『士族の歴史社会学的研究』（名古屋大学出版会、第7章）によれば、丹波篠山において高等教育に進学したのは裕福な上級武士と中級武士の子弟であった。下級武士の子弟が高等教育に進学するのは、ごくまれであった。しかも、裕福な上級武士と中級武士の子弟が高等教育に進学したのは、社会的上昇を目ざしたのではなく、伝統的な学校観・教育観に媒介されて「当然の如く」学校へ行った。そしてそのことが結果的に高い社会的地位をもたらした。下級武士の子弟は、窮乏化して労働者階級になっていった。

つまり、丹波篠山では上級武士と中級武士の子弟がまず最初に中等教育・高等教育に進学し、学歴が社会的地位を作ることの見本を見せた。ところが遠州横須賀では、西尾家が所替えで移って行ってしまった。その後江戸から遠州横須賀に移住してきた旗本たちが裕福であったとはいえないだろう。遠州横須賀では、学歴が高い社会的地位をもたらすことを示すはずであった上級武士・中級武士を欠いてしまったと思われる。

学歴主義を早期に体現すべきもう一つの社会層は、地方名望家、素封家である。地方名望家が存在する場合、その家の子供は、息子ならば高等教育まで、娘ならば中等教育に進学するであろう。そして町の住民は、高等教育を終えた名望家の息子を「立派な人物」と見なすようになるであろう。高学歴が「立派な人物」と結びつけられることによって、町の住民の間に、高学歴の意味が明瞭に認識される。すると、名望家に次ぐ社会層が、名望家の後を追って、息子を中等教育、高等教育に送り出すであろう。そしてその次は、という形で学歴主義が成立する。

本書の執筆者たちは、経済史研究者であればかならずおこなうであろうような階層区分をおこなっていない。そのため、丹波篠山における明確な階層区分は分からない。ただ、丹波篠山における地方名望家の存在を示唆する発言が記録されている。1914年生まれの小作農三男の発言である。

「(中学へ行った人は)『身分の高い』人。地主や惣代さんの息子。中学へ行ったのはクラスで四人。ほんまに限られた家しか行かなかった。差別があった。自分で行きたいとも思わなかった。」(193)

丹波篠山では、1920年代において、「地主や惣代さん」が「身分の高い人」と観念されており、地方名望家であった。1クラスの人数がわからないので、「クラスで四人」という中学校進学者数がどの程度の割合か不明であるが、少なくとも、毎年、クラスで何人かは中学校へ進学していることが推察される。それだけいけば、範型としては十分であろう。

遠州横須賀では、その家の子供が「お坊っちゃん」「お嬢さま」などと呼ば

れるような名望家はいなかった。少なくとも子供たちのあいだで、「身分の高い」家と観念されるような家はなかった。

9 結語

この書評において私が主張しようとしたことは、次の点に尽きる。丹波篠山は産業化の波に乗り遅れた小さな田舎町であるにもかかわらず、「昭和初期」という早期に学歴主義が成立した。本書の著者たちは、この事実を、学歴主義の波が、丹波篠山のような田舎町にもようやく押し寄せた、と理解した。しかし、その理解は誤っている。丹波篠山のような郡部の田舎町に、早期に学歴主義が成立した、と理解し、その上で、なぜ丹波篠山に早期に学歴主義が成立したのか、問うべきであった。

丹波篠山にかんするプロジェクト・メンバーは、天野郁夫を代表者として、吉田文、志水宏吉、広田照幸、濱名篤、越智康詞、園田英弘、森重雄、沖津由紀であった。これだけのすぐれたメンバーを集めながら、なぜ理解を誤ってしまったのであろうか。本書の著者たちが理解を誤った理由は、学歴主義の研究では、学歴主義と関連しない中等学校を学歴主義との関係で位置づけることに成功していないからである、と思われる。

かつて天野は、学校の機能を「地位形成」と「地位表示」に分類した。やや長文になるが、天野の主張を引用しておこう。

「社会階層とのかかわりで見えた場合、教育には二つの側面がある。ひとつは「地位表示」的な側面であり、もうひとつは「地位形成」的な側面である。教育の地位表示的な側面は、たとえば江戸時代の藩校に端的に見ることができる。そこでの教育は、支配階級である武士の身分にふさわしい教養や文化を身につけさせることに、その目的があった。教育を受けたことによって武士になるのではなく、武士であるからこそ教育を受けなければならない、という関係がそこにはあった。つまり教育はそこでは、支配階級としての武士の地位を「表示」する役割を果たしていたのである。

明治維新後につくられた近代学校での教育は、これとは著しく異なっている。教育の機会が身分にかかわらずすべてのものにかかれており、そこでの教育のねらいは一般的にせよ専門的にせよ、特定の水準と内容の知識を習得させることにおかれた。そして学校で習得された知識（その証明としての学歴）は、職業につき、一定の社会的地位を獲得する手段として効用をもち、利用されるようになった。教育の地位「形成」的な側面とは、そのことをさしている。わが国の近代学校教育が発足当初から、この「地位形成」的な性格をいかに強くもっていたかは、これまで見てきたところからも明らかだろう。学校が早くか

ら、社会的な（上昇）移動を目指す人々を多数集めることに成功し、その結果として激しい受験競争に悩まされることになったのも、そのためであった。

しかしこのことは、わが国の近代学校での教育が、「地位表示」的な性格を全く失ってしまったことを意味するわけではない。自分たちの所属している社会階層の文化や教養の独自性や、その世代的な再生産の必要性を、つまり「地位表示」的な教育の必要性を感じており、またその必要や要求を表現する社会・経済的な力をもった人々がいれば、そうした要求を満たすような学校が生まれるはずである。そして実際に、「地位形成」的な学校だけでなく、「地位表示」的な学校もつくられ、存在していた。

中等段階でいえば高等女学校、それに地方の実業学校などは、そうした「地位表示」的な性格の強い学校であったとみてよい。農業や商業などの家業継承者にとって、農業学校や商業学校での教育は専門職業教育としての側面をもっていたが、それ以上に彼らの旧中産階級としての社会的な地位の高さの象徴として、そこで教育を受け学歴を取得することが必要であった。職業と事実上かかわりのない高等女学校の場合には、それはさらにはっきりしている。進学準備教育の機関として、「地位形成」機能の強い中学校に対して、これらの学校での教育的選抜には、それほど厳しきは要求されなかった。少なくとも昭和期に入るまで、高等女学校や実業学校は、そうした「地位表示」的な、したがって教育的選抜とも職業的選抜とも、かかわりの少ない学校だったのである。

高等教育では、官立の諸学校はほとんど純粋に、「地位形成」的な役割だけを期待されてつくられていたとあってよい。それは官立の専門学校や大学の学部・学科編成、すなわち専門教育の内容を見ればわかる。帝国大学は初めから工学や農学のような、ヨーロッパの大学には見られない応用的な学問を教える学部をもって発足した。文学部をもたない帝国大学さえあった。専門学校も事実上すべてが農・工・商の専門職業教育の機関であり、しかもその卒業者には、家業の継承者となることではなく、官庁や企業のような組織のなかで被雇用者として働くことが期待されていた。」（天野郁夫[1996]『日本の教育システム——構造と変動——』東京大学出版会、225-27）

天野による学校の「地位表示的」機能と「地位形成的」機能の指摘は秀逸である。しかし、高等教育機関には見事にあてはまるこの指摘は、中等教育機関には当てはまらない。

天野は、この引用文において、「地位表示的」な中等教育機関として、「高等女学校、それに地方の実業学校など」を挙げ、さらに、実業学校として具体的に「農業学校や商業学校」に言及している。このような指摘にたいしては、「地方の実業学校」ではない実業学校、すなわち大都市に所在する実業学校は「地位表示的」ではなく「地位形成的」なのか、さらに、「農業学校や商業学

校」が「地位表示的」だとしたら、工業学校は「地位形成的」なのか、という疑問が生じる。天野は、意図して工業学校をこの引用文から落とした、と思われる。天野は、工業学校が「地位表示的」と「地位形成的」の二分法になじまないことをよく知っていたからである。

天野は、1997年になって、自分の修士論文（1963年度）をはじめて活字論文にした。天野郁夫[1997]『教育と近代化——日本の経験——』玉川大学出版部、第Ⅱ章、である。それは「工業化と技術者養成——人材形成のメカニズム——」と題され、19世紀から戦間期までの技術者養成にかかわった大学、専門学校、工業学校の教育内容と卒業者の需給構造を分析したものである。この修士論文において天野は、工業学校が技術者養成かそれとも技能職工—職工長を養成するのか、ついにその位置を確定することができなかったこと、そして、地方の工業学校の卒業生は地元就職するよりは他府県に流出することを指摘していた。このような工業高校が、「地位表示的」であるはずがない。また、技術者養成かそれとも技能職工—職工長を養成するのか明確ではないため、「地位形成的」ともいいがたい。工業学校が「地位表示的」でもなく「地位形成的」でもなかったことは、「戦前・戦中期大阪の工業学校——大阪市立泉尾工業学校・大阪市立泉尾工業専修学校の事例——」（『大阪大学経済学』2007年3月号）をはじめとする沢井実の一連の工業学校研究が詳細に実証している。

工業学校が典型的に示しているように、高等教育とリンクしていない中等学校は、「地位表示的」、「地位形成的」という二分法では説明されえない。私自身の経験からいっても、そうした学校は、「地位」と関係しているのではなく、「手に職」をつけることを主たる目的としている。「手に職」という考えは、生活を成り立たせることを最優先の課題としている。生活がなり立てばよいのであるから、会社に長期勤続することも、会社を頻繁に変わることも、さらには自営でも、かまわない。何らかの形でつねに社会的に需要される技能を身につけ、生活を成立させる。これが「手に職」の思想である。「地位」の形成や表示ではない。

たしかに、「手に職」派といえども、学歴と無関係ではない。しかし学歴の意味は、「地位形成」派とは基本的に異なっている。私は中学生時代、「手に職」派であった。私は工業高校ではなく、工業高等専門学校に進学した。明白に、高専の方が工業高校よりも高い学歴であった。しかし私は、高い学歴それ自体を求めて高専に進学したのではない。「手に職」といっても、「職」には、科学的知識の度合いからいって、そうした知識がほとんど必要とされない手先の器用さによる「職」から、かなりの科学的知識が要求されるような「職」まで、さまざまである。科学的知識が要求される度合いが高いほど、より安定した「職」につけるのではないか、というのが、工業高校よりも高専に進学した

理由であった。つまり、「地位」を求めるのではなく、安定した生活を成り立たせる「職」の確立を最優先していた。

戦前の実業学校は、少なくとも研究の進んでいる工業学校を見る限り、「手に職」思想のための学校であった。義務教育以上の学歴を求めたといっても、中学校→高等教育という学歴主義とは明確に異なるものであった。戦後の学制改革にともなって、「手に職」派は、工業高校などの職業高校に進学するようになった。高校への進学率が高まるにつれて、高校進学の本質は、学歴主義志向、「手に職」派、そして、とりあえずは高校へ進学させておこうという「とりあえず」派となった。「とりあえず」派は職業高校にも進学したが、ある時期までは「手に職」派が職業高校の主力であった。私が中学生時代の1960年代前半は、私の身の回りでも、「手に職」派が工業高校、商業高校、農業高校に進学した。「手に職」派が職業高校の主力となっていた限りでは、職業高校は地域社会において高く評価されていた。

しかし次第に、職業高校の主力が「手に職」派ではなくなってきた。その時期は、1960年代後半から70年代前半である。次のような証言が、そのことを物語っている。

「ちなみに茨城県の中高等教育機関でもっとも古い伝統を誇るのは、創立百年余りの県立水戸一高である。同校は、高校の序列化のなかで県内のトップの座にランクされる進学高校であるが、明治、大正、昭和の十年代頃までの「水農」（県立水戸農学校—野村）は、中等実業教育機関のエリート校として、県教育界においては、水戸中学（水戸一高の前身で「水中」の略称を持っていた）と双壁をなしていたという。その時代のことを県教委の一人の指導主事はこういった。「その当時は、水農と水中は全くの同格で、水中に入学可能な学力のある生徒でも、農家の長男や農業を継ぐことを約束させられているものは、水農を選ぶのが一般的だったから、水農も水中と同様に県下の俊才を集めていたといえます。」そう語った五十年配の指導主事も旧「水農」から茨城師範学校（茨城大学教育学部の前身）を出て、教育界に入ったのだという。そして彼は「それに比べて、いまの水農は……」と絶句した。

このように、かつては農業教育のメッカ的存在として、県中等教育界に君臨した「水農」であったが、普商工農の序列化によって、昭和四十年代からは「水戸一高との間に、まるで月とスッポンほどの格づけが生じ、水農という伝統ある校名は、過去の栄光から現在の屈辱的なものに一変させられてしまった」（水戸農業高校社会科教諭の話）のであった。（須長祥行[1984]『農業高校—近代化農政の縮図—』三一書房、11-12）

工業高校も同じ道をたどった。

「ここで取り上げる工業高校は、大正の初めに創立された甲種の、すなわち

中学校と同様、上級学校への進学が可能な工業高校である。府立三中（現両国高校）と並んで下町の秀才を集め、化学工業界においてすぐれた人材を輩出してきた"名門校"であった。...学校の変化をたどると、大きく 1948 年新制高校として発足してから 1960 年頃までの 50 年代の発展期、60 年代の工業高校への要望が高まった時期、70 年代の零落してくる時期、80 年代の再生をかけた動きをはじめめる期、という四つの時期に分けることができる。

50 年代は、...戦前に培われた地元の評判が続いており、良質の生徒がこぞって入学し、大学に進学するクラスを特別もうけてもいた。また、当時、都内に化学系の高校が 5 校しかないということもあり、大学への進学者のほかは、卒業生のほとんどが大企業の研究所に就職していた。

60 年代に入り、次第に変化がみえてくる。高度成長と石油化学の興隆の時期のなかで、都内に 11 校の工業高校が新設され、生徒数は一気に倍増した。しかし、生徒の質はまだ高く、クラブ活動や生徒会活動も活発であったし、卒業生の就職も、研究所から生産現場の管理部門になるという変化はあるものの、三年生の一学期には就職希望者のほぼ全員が決まるという状況であった。しかし、1960 年代の学園紛争前後から変化が顕著になっていく。1970 年代に入ると、図 2・1 に明らかなように、入学者のかなりの人数が卒業せず、在学途中で退学していく生徒が増えていき、1980 年代の初め頃には、入学生の 30%から 40%近くが退学するという事態になった。」門脇厚司/陣内靖彦編[1992]『高校教育の社会学——教育を蝕む<見えざるメカニズム>の解明——』（東信堂、22-23）

なぜ職業高校は「手に職」派を集めることができなくなったのであろうか。私は、そこには二つの理由があったと考えている。

第一に、「手に職」派の衰退である。「手に職」派の基盤となっている思想は、安丸良夫（[1974]『日本の近代化と民衆思想』青木書店、1999 年平凡社ライブラリーで再刊）が主張する通俗道徳である。通俗道徳は高度成長が進む中、1960 年代後半から衰退しはじめた。通俗道徳がなぜ衰退しはじめたのかについては、きちんと論じようと思えば相当の枚数を必要とするため、ここでは論じない。通俗道徳の衰退は、「手に職」派の数が絶対的に減少していくことを意味した。

第二に、「手に職」派が減少していく時期に、大学が elite university から mass university に変化していった。工学部の学生数は、1960 年に 92,572 名であったが、1970 年には 283,674 名と 3 倍にもなった。それまで、「手に職」派にとって大学は、縁遠い世界であった。しかし大学の大衆化とともに、そしてそれを支える所得の増大によって、「手に職」派が大学工学部に入学するようになった。職業高校から大学への進学は容易ではない。大学への進学を考えるようになった「手に職」派は、職業高校を避け、進学高校に進むであろう。職業高校は必

然的に、「とりあえず」派や、進学高校に行けなかった「やむなく」派が主たる生徒になった。

私の中学校時代は1960年代前半であった。「手に職」派が職業高校に進学するほぼ最後の世代であった。思い返せば、「手に職」派が職業高校に進学しなくなるであろう兆候は、すでに存在していた。遠州横須賀でも、「学力社会」が成立していた。「学力の高い」生徒は、他になんの取り柄がなくても、きわめて高い人物評価評価を得ることができた。「学力社会」は、やがて、高等教育と接続するであろう。私は「手に職」派であった。だから大学進学は考えなかった。しかし、私は工業高校を受験しなかった。成績の上位者は進学高校を受験するという大須賀中学校の慣例にしたがったとはいえ、私の心のどこかに、工業高校では物足りないという気持ちもあった。

1962年に設立された5年制の工業高等専門学校（高専）は、いずれの高専においても、設立当初数年間は競争倍率が10倍を超えていた。このことは、「手に職」派が大学に進学する直前の時期であったがゆえに、引き起こされたのではないか。工業高校よりも上であり、しかも大学ではない高等教育機関は、私のような、試験成績がよく、かつ大学に進学を考えなかった最後の「手に職」派にとって、いわば理想的ともいえる学校であった。きわめて皮肉なことである。高専は、なんの理念も理想もなく、ご都合主義的に設立された。その高専が、私のような「手に職」派にとって理想的な学校に見えたからである。もし高専などという学校が設立されなかったならば、初期の高専生の大半は進学高校に進学したであろう。そして大学に進学する「手に職」派の最初の世代となったであろう。

この書評の冒頭において、私が個人的経験をくわしく述べるのは、本書の執筆者たちが個人の聞き書きを積極的に利用しているので、私の体験もまたなにがしかの価値を持っていると考えたからである、と書いておいた。じつをいえば、私が自分の体験をくわしく書いておこうと思った理由は、それだけではない。繰り返し述べているように、私は、大学に進学しない「手に職」派の最後の世代であった。教育社会学による学歴主義研究は、不当にも、大学に進学しない「手に職」派に関心を払わなかった。私のような「手に職」派は、郡部にも、地方都市にも、そして大都市であっても下町に存在していた。私は、こうした「手に職」派の存在した事実を広く知らしめる義務があるように思った。さらに、初期高専生の気持ちを書き留めておくことも、歴史の証言ではないかと思った。

ずいぶん長い書評になってしまった。私は、教育社会学が「手に職」派を学歴主義研究のなかに正当に位置づけることを強く望んでいる。